

看護におけるスピリチュアリティ感覚の形成

菱刈美和子

Nurturing Spirituality in Nurse

Miwako HISHIKARI

This article aims to clarify that some features of nurturing spirituality in the process of nursing. Spirituality is not a specific power of someone. It is an innate potential in every person. We must this potential reactivate in education.

はじめに

これまで、ナイチンゲールの看護思想および理論、その現代への応用等について考察を重ねてきた¹⁾。このなかで、ナイチンゲールの思想の基盤には一言でスピリチュアリティ、つまり人間や世界、さらに宇宙全体に対するある種の感覚があることが明らかとなった。それが現代ではどう捉えられているかについては、次節で整理する。が、注意しなければならないことは、この感覚つまりセンスが、決して特殊な、いわば超能力ではない、とナイチンゲールが強調する点である。前稿でも指摘した通り、ナイチンゲールにおいて感情と知性とは不可分のものとして作動するが、むしろ、あくまでも知性に基づく観察と訓練が重視されていることを看過してはならない。彼女は、『看護覚え書』でこう述べている。少し長くなるが、引用しておこう。

本当にすばらしい看護師が、他の看護師ではまったくできなかったことを、患者がよろこんでるように仕向けているのを見ると、人々はこれを「天賦の才能」とか、またはロンドンで数年前によく興業された生物学的なトリックの一種ではないかと思う。

だが看護には「神秘」などまったくない。よい看護とは、どの病人にも共通するものと、

個々の患者によって異なる特徴をよく観察することにつきる。

動物に対して不思議なパワーを持つ人もいる。森で鳥を呼び寄せたりできる。これはかつては魔法と考えられてきたが、現在では計算少年と同じように、何か特有の能力であると思われている。つまり鳥の習慣と本能をよく観察した結果にほかならない。

そこで、ある看護師には「特殊な力」があり、また別な看護師は患者に対する力をもたないことの違いだが、前者が患者に影響を与えるものをよく観察していたのに対して、後者にはこの観察力がなかった、ということなのである²⁾。

ナイチンゲールの主張は常に、わたしたちは「分かっているけどできない」ではなく、本当は「分かっているからできない」という主知主義の立場から語られている。注意深く観察し、本当に分かっているならば、すばらしい看護ができるはずである。

さて、スピリチュアリティという用語に何か「神秘的」なものを連想しがちであるが、決してそうではないことをナイチンゲールにおいて再確認してみた。彼女にとっては、知性をフルに活用した観察は、むしろ感情とともに作動するものであり、その基底には、まずは自己を

含めて他者、とくに患者や世界全体からさまざまな情報を注意深く聞き取る、という感覚がある。それが、ここで強調される観察の前提とされるスピリチュアリティ感覚であることを本稿では明らかにしたい。ついで、その形成あるいは涵養についても言及したい。ナイチンゲールの時代でも同様であるが、現代では自己を含め、とくに他者の声にならない声に耳を傾けるということが、はるかに困難になってきているように思われる。この傾聴の態度こそが、看護の原点であることを再認識したい。

1 節 スピリチュアリティとは

あらためて現代において、スピリチュアリティはどう定義されるであろうか。以下、ホワイトを手がかりに整理しておきたい³⁾。

スピリチュアリティの基となるスピリット (spirit) とは、簡単にいえば生き物を生き物たらしめている原理であり、古来西洋では、それはプシュケーつまり、プネウマ (息) と見なされてきた。わたしたちは呼吸をしている限り、生きている。外界とわたしたちの内界とは、常に息を通じた交換によって生きている。わたしたちが死ぬとき、息を引き取る。この息は、世界の宇宙の息と共通のものとして見られていた⁴⁾。要するに、生きとし生けるものを生き生きとさせている何かを指して、スピリットという。たとえば、看護においてもスピリットがない看護師の場合、それは見せかけの看護師ということになる。いわば気の抜けたビールやシャンパンと同じである。ナイチンゲールは、自らもスピリットをもって看護に当たり、さらにスピリットをもった看護師を養成しようとしたのである。引き続き、現代における定義をいくつか掲げておこう⁵⁾。

人々の生活 (lives) を生き生きとさせ (animate), 彼らを感じを超えた現実 (super-sensible realities) に至らせるのを助けるような態度 (attitudes), 信念 (beliefs), そし

て実践 (practices)。

事物 (things) は単に物理的 (physical) なものでも金銭的 (financial) なものでもないと気づかせるような、わたしたちの内にある本質 (essence)。人間として機能する (function as a human being) ように助け、わたしたちに意味 (meaning) と目的 (purpose) とを与える何か。

人の生命のなかにある力 (power) であり、意味と目的と満足 (fulfillment) を与えてくれるもの。生きることへの意志 (the will to live), 自己および他者、さらに自己を超えた力に対する信念であり、神 (God) へと至るもの。

いずれも、わたしたちの人生に意味と目的とを与え、生き生きとさせてくれる「何か」 (it) を指して、スピリチュアリティと呼んでいる。これは実体概念ではなく、あくまでも機能概念であり、働きを示している点に注意しなければならない。見えないものは存在しないのではなく、まさに息や空気や音と同様、見えなくとも動きとして存在するものは多々あることを、とりわけ現代人は忘れがちである。これは個々の宗教といった枠組みも超えて、わたしたちに生きる意味や目的や充実感などを感じさせてくれる気づき、あるいはインスピレーションともいえよう。大切なのは、こうした感覚が、すべての人々に本来は内在しているはずである、という点である。ホワイトは、こう簡潔にまとめている⁶⁾。

スピリチュアリティとは…

- ・すべての人々のなかにある生まれつきの潜在能力 (an innate potential in every person)
- ・それぞれ個人にとって固有のもの (unique to each individual)

- ・人間らしくあることの本質 (the essence of being human)
- ・身体と精神とを分離するものではなく統合するもの (integrated not separated from body and mind)
- ・日常の経験から超絶したものでも孤立したものでもないもの (transcendent but not isolated everyday experiences)
- ・涵養されるべきもの (to be nurtured)
- ・意味や希望や他者とのつながりと結びついているもの (linked to meaning, hope, connection with others)
- ・宗教と同じではないが、これと関係しうるもの (Not the same as religion, although it might be linked)

じつにスピリチュアリティとは、「人間らしくあること」にとって当たり前の機能であるが、これは同時に潜在能力でありつつも「涵養されるべきもの」とされている点に注目しなければならぬ。スピリチュアリティは常に日々の経験のなかにもありつつも、それは涵養、あるいは形成もしくは教育されなければ、作動しえない機能なのである。

かつてノディングズは、すでに教育学者としてもケアリングからの観点から、この重要性をつとに指摘し続けてきた。「学校ではどうして、スピリチュアルな充足感を促進することをあまりしないのか」⁷⁾。学校で宗教を教えることと抵触せずに議論できるのに、と。さらに、「日々のスピリチュアリティは、幸せ (happiness) に対して重要な貢献をする力を秘めています」⁸⁾、と『幸せのための教育』のなかで述べている。日の出や日没の瞬間、自然体験のみならず、あらゆる芸術を含めた美的体験、あるいは人と人とのあいだのちょっとした優しいやりとりのなかで、わたしたちがいかに日常的にスピリチュアリティを作動させ、そこにケアリングの原点を見出しているか、ノディングズはこのなかで詳述している。しかし、それに

はやはり教育が必要である。次に、スピリチュアリティ感覚の形成、もしくは涵養について見てみよう。

2 節 スピリチュアリティ感覚の形成

先にもホワイトは、スピリチュアリティをして「涵養されるべきもの」(to be nurtured)と捉えていること示した。これは、「すべての人々のなかにある生まれつきの潜在能力」(an innate potential in every person)でありながらも、なおも涵養されなければ発動しえないものである。つまり、積極的な形成もしくは教育が必要なのである。

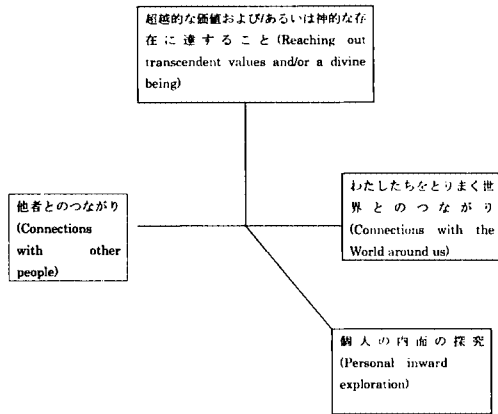
ホワイトは、スピリチュアルな成長の本質に、人生の意味、希望、つながりあるいは理解を求めること (searching) がある、という。究極的には、人生の意味の探究が、スピリチュアリティという働きの本質にはある、という考えである。このための状況や経験は、日々多くの人々がしているはずだ、とホワイトはノディングズと同様の見解を示す。

とくに、スピリチュアリティを涵養するには、たとえば、忙しすぎる日常生活のなかで、自分自身のためだけの、また他の人々にとっても同じような、静かな場所が必要である。

あるいは、看護師にとっては、患者が人生の意味や希望やつながりについて語る、つまりスピリチュアリティの働きの結果について語ることに耳を傾けることが、まさにスピリチュアリティ感覚の形成に導くという。ここでの、共感が自ずとスピリチュアリティを涵養する結果となる。

あるいは、自らの不健康、ときには病いは、個々人に人生の意味や目的についての再考させるきっかけともなる。すなわち、からだと心とが一体となって己れのウェルビーイングを求めようとするとき、そこにスピリチュアリティは常に育まれているといえよう。それには、まずは、とりわけ人生の意味や目的や希望について語ること (talking about it) が必要であり、ま

たこれを傾聴することも必要なのである。ホワイトは、こうした関係を以下のように図式化している⁹⁾。



こうしたスピリチュアリティの働きの交差点に、わたしたちはいることになる。それはまた、タマネギの比喩でも語られる¹⁰⁾。

わたしたちは、まるでタマネギである。それは多重の層をなしている。表面は、だれからも見える層であり、公的な生活で演じているさまざまな役割や性格である。看護師であるとか、親であるとか。では、その下にはどのような層があるか。少ない人々にしかわからない、わたしたち自身の本来の性質がある。つまり、仮面の下にあるもの。ここには、さまざまな情念がうごめいている。では、そのさらに奥には、あらゆる外的な役割や能力を取り払った、その奥には、これは求め続けられるべきものである。

大切なのは、これらすべてがわたしたちにとって本質的であり不可欠なものである、ということである。タマネギのすべての皮が、層が、どれをとってもみなわたしというひとりの人間なのである。こうしたことに気づかせることもまた、スピリチュアリティ感覚の形成へとわたしたちを導いてくれる。

さて、人生の意味を求めることについては、ロゴセラピストのフランクル (Viktor Emile

Frankl, 1905-1997) が、「意味への意志」(The Will to Meaning)として、より多く語っている。「意味への意志は、多くの人々においては事実であって、決して信仰ではない」¹¹⁾とフランクルは断言する。それは、人生の価値への志向性であるが、「価値というものはしかし、人間を駆り立てるものではありません。価値は人間を押し動かす (*push*) ものではなく、人間を引き寄せる (*pull*) ものなのです」¹²⁾。という。わたしたちは自ずと内なる根源的な力によって、人生の意味へと、そして価値へと引き寄せられている。ゆえに、ロゴセラピー (ロゴス Logos 意味 meaning = セラピー) は教育でも宗教的説教でも道徳的訓戒でも論理的証明でもない、とフランクルはいう。

が、「意味への意志」およびロゴセラピーがスピリチュアリティ感覚の形成とどう関連しているのか、その具体例については稿を改めて述べることにしたい¹³⁾。

おわりに

今後は、患者との talking about *it* によって、看護師および看護師を目指す学生自身が、どのようなプロセスを経て、スピリチュアリティを涵養するのかについて、明らかにしていきたい。患者のスピリチュアリティに共感し共振する看護者のスピリチュアリティは、どのようにしてうまく発動しえるか、という問題である。今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 「共立女子短期大学看護学科紀要」2006-2009年、第1-4号所収の一連の拙稿を参照されたい。
- 2) V. スクレトコヴィッチ編『ナイチンゲール 看護覚え書 決定版』(助川尚子訳、医学書院、1998年)、205頁。傍点は引用者による。原文「看護婦」は「看護師」とした。
- 3) Gillian White, *Talking about Spirituality*

- in Health Care Practice : A resource for the Multi-professional Health Care Team*, London & Philadelphia: Jessica Kingsley Publishers, 2006.
- 4) C. トレモンタン『ヘブル思想の特質』(西村俊昭訳, 創文社, 1963年), 178頁以降を参照されたい。
 - 5) White, *op. cit.*, p. 85.
 - 6) *Ibid.*, p. 86.
 - 7) N. ノディングズ『幸せのための教育』(山崎洋子・菱刈晃夫監訳, 知泉書館, 2008年), 214頁。
 - 8) 同前書, 221頁。
 - 9) *Ibid.*, p. 92.
 - 10) *Ibid.*, p. 90.
 - 11) V. E. フランクル『意味による癒し—ロゴセラピー入門』(山田邦男監訳, 春秋社, 2004年), 49頁。
 - 12) 同前書, 8-9頁。
 - 13) 山田邦男編『フランクルを学ぶ人のために』(世界思想社, 2002年), 111頁以降「フランクルと看護」を差し当たり参照されたい。